

焼き棒のテクニク（暗室作業の小道具）

カメラマンの華やかな取材を表芸とすると、暗室での仕上げ作業は渋い裏芸である。写真を撮る楽しさはカメラを持ったことのある人ならご承知のはずだが、その後の現像、焼き付け、引き伸ばしはDP屋さんまかせの時代で、どうやって写真が仕上がるのかわっている人は少ない。最近はカラーフィルムでの撮影が多く、プリントもすべて自動とあって、プロカメラマンでも撮影だけで暗室は他人まかせの人が多い。その中で新聞社だけは、自分で撮ったものは自分で仕上げるのが原則である。或るカメラマンが、

私は日本のシステムが好きで、自分で撮ったものは原則として自分で仕上げるのが最も自然であると考えている。最近、写真のオリジナルプリントという問題がクローズアップされている。撮った人が焼き付けまで責任を持つことである。

現場からフィルムがどんどん運び込まれてくる。暗室にずらり並んだ引き伸ばし機の前に、これらのフィルムを処理するための二つの小道具がおかれている。現像の乗り過ぎた部分を「焼き出す」道具と、フィルムの薄い部分を、覆い露光をおさえる「覆い棒」という道具である。毎日使っていて特に名前がある訳でもないが、「焼き出し紙」とか「覆い棒」とか呼ばれている。

暗室のペテランになるとこの道具を使わず掌や指がこの代役を果たす。単調に露光をかけて機械的に仕上げられる写真は新聞社では残念ながら極めて少ない。

暗室の仕上げを計算して写真を撮る。これが本当の写真の醍醐味であろう。

或る時、空梅雨を皮肉った写真を撮った。カンカン照りの中をコーモリ傘持参で出勤しているサラリーマンのスケッチを撮って来たフィルムを見て、デスクがピンとこないのがボツにした。帰ってきたカメラマンは自分のフィルムをそと持って暗室に入って焼き付け、改めてデスクに写真を見てもらった。

フィルムではサラリーマンに露出が合っているので太陽の部分が露出オーバーでイメージが湧かなかったが焼き付けられた写真では十字紗でクロスした太陽がはつきりと表現されている。この写真でサラリーマンの明るさを一とすれば、太陽の部分は十以上の露光で焼かなければ出てこない。ここで、太陽に露出を合わせて撮影するとサラリーマンは完全にシルエツトになり傘も人物も写真では浮き出されてこない。その写真は、人物と傘を考えて露出しておき、真黒のフィルムとなっている太陽の部分をネガから焼き出す必要があったのである。細工は流々仕上げをごろうじろ」というものだ。

ゴールデンウィークが始まるとどっとマイカー族が地方に流れ出し、最終日には逆に夕方から深夜まで都心に向かう高速道路が渋滞するのが普通だ。これをヘリコプターで夕闇せまる頃撮影した。夜間でもヘリは飛べるが写真の露出が難し

い。そこで暗くなる前に撮っておいたのだ。ところが深夜まで渋滞が続いたのでそのニュースに入れる、夜半になったの車の渋滞の写真が必要になった。

そこで、デスクは夕方撮った写真から夜間の写真を作ることにした。夕方取材した後半のフィルムには高速道路の外灯も、車のヘッドライトもすでにについているのがある。このフィルムに露光を多目にかけて印画紙の現像を進行させていくと完全に夜のムードになる。この写真を見せると、渋滞した車が夜遅くまで行列しているように見える。まったく暗くなつてからヘリが飛んで取材したときか見えない出来栄であった。

写真には暗室技術によってイメージが生み出されていくものが多い。

■著者紹介

井上 敏夫（いのうえ としお）

1929年 埼玉県大宮市に生まれる
1950年 日本大学芸術学部写真学科卒業
1952年 サンケイ新聞編集局写真部入社
1979年 サンケイスポーツ新聞写真部長
1981年 サンケイ新聞編集局写真報道室長、現在に至る

住所 〒154 東京都世田谷区弦巻
電話 03

シャッター・チャンス

定価 1,200円

昭和58年8月13日 第1刷発行

著者 井上 敏夫

発行者 野地 二見

発行所 日本工業新聞社

〒100 東京都千代田区大手町1-7-2

振替 東京1-36340 電話 03-231-7111

印刷所 サンケイ総合印刷株式会社

© 1983 検印省略 乱丁・落丁はお取り替えます

ISBN4-8191-0608-2 C0095 ¥1200E